芭蕉翁附合集　上

中村俊定文庫
文庫 18
529
1

序

芭蕉翁附合集八
翁の孫松村氏桃隣
法集よりとくとかして
亥歳辛巳乃冬海内の
いまゝ梓切の法平
及してその人後後世を
よろこぶ士賞かしこよ祭

俊宣藏

字して文字言葉の
あやまちなかるべ
くも冊子殆牛ふ汗して
情を心のためも必し
なれて吉年の表より
折々藤代侍白のこと
接華して天地人
界の書とす大き紙

詩系主人の補助とも
宜書何の人ゥ多と学して
詩文接会清事ゝのひ
樹木ゝうつを事を
たゝめ毛とゆ百ふ
関しあゝに熟読
をゝかゝ侍ゝ能雅
能集能教能侍の

一流あるべし

雪中菴蕉太

安永五丙申季秋

元例

一四集共一世代附合と選の趣ふのう
次歌の仕成ハ言負ホ宗因の
余風なれども蔵法集ふもう
たるも又多くの歌風一変後編の
時と待るのみ
一集中考ふるの附句ハ
こゝ九の集ふ出ずとも

[illegible]と歌木間猶その秋
[illegible]も待ちえたりと詠じてかふ

一　立琴ふ塊の絃忘貝ふ妹脊の
附句ハ歌の仙分よりいづる人丸
相のうたなるこの玄妙まるふる
仮あれとも加ふ[illegible]この句歌ふ
あ[illegible]ひて某ら罷[illegible]て
一　千[illegible]ひて我百句歌と

あ[illegible]ひと対し山ハふ蜜柑の色の
芙ふ歩く[illegible]この句まこうて
変句ふ[illegible]る事と[illegible]て
風ふ[illegible]伯[illegible]集と嘲ぶてのち
伊賀の相[illegible]の選ぶ蜜柑の
色とい[illegible]ぶ集中ふ十負まに
歌の附句[illegible]て貴ふあ[illegible]
今歌周[illegible]なる事と[illegible]

よりて寛文五丙午歳この集中
又誤脱多し後人これを
たゞしめ
一編集みな一巻より菊の
巻乃一巻ハ紙数多後世
名残なれとこゝろをいかん
元禄七甲戌九月廿七日　宝女亭の
無名

一この集を法眼より出る
冊子のうちより抜加ふ
ゝ法眼も天和より
元禄七甲戌迄の風雅を
りて自ハとなるといへ
句数四百のお遠あらん

宮城県図書館

芭蕉翁附合集巻上

脱し部

伺候易岩地処在

人生七十古来稀

詩あきんとまと含る伺候(サカテ)の乳

を泡のうれてるふかる紀

寒月や鰐のつりしかれて

冬の紅の乃あきうらる

宮城県立図書館

桧笠雪と命かやとりけり

餞別

稿一帖の手足つミゆく

时は秋吉野をこめし旅の侍と

扇をとり手ふ雲風乃月

江戸桜んかよんいくちん

薩摩の露よもりなる月

志のうの旅ふ恰とめ世露おの鏡

一ねとの者く千寿まとむ道

时あしふ継借ゑん草の庵

火燵の炭よ夜と浅く人

芭蕉翁ふも白よ草鞋わるし

挨拶

月と紅葉を酒の乞食

花まいりせん雨りきりハ秋の名

芭蕉とちゝふ風の破笠

花の咲男すのう草花旅の那

秋ふ志ねく蝶のくつと迄

所の掃むら拾ん赤乃実
をくさしに実れ共　日十一
寄の篇れ蔬菜よ牧なと呉せや
古人うやうの秋乃末かく
立ぬよ赤稀まくみこと
立ぬやを庭の和れ宮
めつやを紫れ中の義実
清士の影とを打ち物

費蔬を是ほ徒なと乃実
蔬菜の寄を乃をる　脇
牧仮や伊吾古れ宮に実を乃ん
砂さむりつ　家呈のあと
いろの名もむつやを乃中
うさきて蛛乃美ハ呉める
ち易よ家宿せや　彼を牧屋
清矢をくの風の業

和歌うの樊よ志ゝ乃ゝ能表
田植とともに福の神紀
原かもとつゝみかゝびびや
酒志ぬゝ
者ゝ乃ゝ月
笠行ゝさめんふ破のけゝふ
尺せゝやか茅るとちる新の畑
その表ふと笠よ初ゝんゆよ歌

時雨てや花ゝく踏る橋金
宿ゝ楠をとむるとう仲
奥底もゝてゝ木の梢うふ
小春に首のうこくゝの虫
ゝまもきびよ梅ゝう奥乃藪桂
菜の俱湯よ紡表雪のひよゝ
わう梅能剣枇杷の房菜ふ
兒にうゝ山茶乃花

梅ちるて山の端ちかう成ぬ
むらさきの雲は紫をはく
はくはくと板の花は神さびて
ひとえと葉と摘穂の赤と黒
樹せよ芋ほりに宿は皆者
秋を惜めるく稲の指穂
蛸の蔓とめる蔓の長
海苔うる芦の穂はうへ

書るのねもかいつくろひぬ初しぐれ
ひとゝ吹風の木は葉をつゝる
市中ハ人の賑ひや夜乃月
異しく門ハ人のこゝ
原付桶の水やゝ冷きり
使の来ゝ青森なる秋
黄出しうこ葉を蔵る柿の実
畠の蕎麦うる卯花

を菊は千葉もかりや生大根
をさ〳〵鶯なる小豆の蝶
素風や素性ゆくえ乃ことは
陽炎いさむ花の糸に
菜種かな物の残や子孫
蛍逐ゆく豊陽花のむ
蜘ふるや初秋の一数の乳
筍もらう次帷子の雛

新麦はさとさくめぬを麦
まゝ初収屋れをるうなり
帷子はゆくるさ海一鶯の声
数一年と稲のさき奥
何もゝて未を海ゆくみふる
露のかゝらとあくる粟の穂
錢を数る拾を考る歌を乳
解番ものゝ尺をる涙鮎

秋のくれも先くに皆登らぬ

萩に様子萩に様ゆゝう

夜豆此花咲に人の足麦の縁

豆の手鶏のをしむ海川

稀との降りまさる宮の松露ふ

日も宮にまとまつゝする 是

第之郎

詩あさんと達と会る酒債の非

冬惜日くれてるに驚 紀

子芯 絶さ夷に実をゆるさん

初音の声としも襟巻て啼る

宮ひしきつくる紅葉の版

世 菊まく弱る蝶の掻わまて

水仙ハみる背に葉を沾らさ

宗の細月にゑつく菜 且

家 猫に乃つ猫通ふ時ともく

梅さくてのゝ〜梅いまゝ幾日
ひとゝの言ぶき葉まさく
葉の中よ遊ぶ歌乃並ひ居る
並ぶや花〜ゝ橘も黒ぶ
雪とりてゝ歌をゝ〜の松
海士のゝ鯨と告る貝吹て
義の陰ゝ〜みの花めつらしや
野ゝ〜や帰ん庭の幕末

七夕の八ゝ八ゝ〜さひ〜〜て
小傾城ゆきてゝ〜ん〜の蓋
腰巾ゝうふ仮乃たきの
吹をゝ〜ゝ袴の初ぶ花あゝ〜て
ゝ〜ぬ程ゝ八ゝ〜ゝ仲の唐
吹ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜に花ゝ〜ひを
一重の仕事八麦ゝ〜おさゝ〜て
唐ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

西さゝぬるまゝに出るこゝの月
蓮をうゑし庭霧晴ふめでたしん
蓮をうゑしてこゝの花さく処又
いつまでの世に時出る蟬
多賀峠に残る雪の月晴て
蓮中のうとゝ習しかつを世
市の子供の笑ふる細布
はおりて小笠とかぶる涼しさ

院是に客と云のつく客さぶ
綿帽子如をむしの里
みそ作ぬ階の猛とつゝしまて
苅揚や水田のう一乃秋光
菅の笠うる日に代のゆる 戸
夜うつ柿を馬のさむうまく
まるまん盆に桃の花書ん
勝に世のせる琵琶の水うし

宵の月うく揺る岩ゝ霜貸て
新麦ハつゝとをぬを逢れ
ゆゝ
馬附の立て淋しき牧乃秋
宵乃松明に乃きハ程をし
ゆの出るまゝの赤き色定
下番と一船渡る手ゆく
乗る今りや小牛の里ゝ茅

笹の言ふるあらつきの指
ひと番霧ゝ蓮て揺る松弦く
松板よりくひあけるみをゝ
蓮舟の一流くさ曳る黄昏
ゝゝゝゝふ祢る折ハ丁子風
いさみ立鷺引を曳る嵐の那
そのまさ乃言かゝ光
大根乃そゝぬ土にふくきて

牛流れて村のさハらやちつき五
きの葉ふき切　梅檀の花
一まいの蓮ハ延ハ豆腐押ひつて
葉かくれとハ事出て瓜の異さ
ハ雲よ　椋の時言ふこと
歩り前の物ふりの人と出しき
うはりき稲の穂ふれ地ふ
戸もとふまん　池の
白雲れうちより弦ハ手そめて
松風ふ新酒をまゝ教をふ
月もうくふく石垣のうへ
町の門ハ遠ふ廉乃光誠と
四人白日
歯栗の葉を初物人の矢ふ頁て
北の山門と　おしあ事れ去
田螺口ふ残の蔵の童乃あとふ

公園より帰うて舟の中にて
かゝる路うへらぬ路もさハ立て
七曜しるしを出こゝ　月
此せきて至孫の石やる銭さん
箱すり鈴ハ声生うてし
月出よ関屋とかゝ人酒ちて
民の宮　竜ハ書る秋　この砂
村面よ市の仮屋と吹とうて

町の中ゆく月をの月
旅人の風かきゆく袁蓋て
ちるもの者ハぬ古刀のひさゝ
掃よせて住る書とやかうた
石の窪さよ墓を掃ゝて
投ゝて迫の編搭旁こめて
風呂焚にゆく月の出かの
地屋数の火縄もゆるを陽きよ

山のいろ〻に紅葉さらもく
叢入ハ色〻叢入と名せり多て
なくさみかの〻 幕 持く
友を八元と〻 橋と掛てめて
門〻 叢出を月のたそり是
秋風のむ合ねと吹立て
追ものうち〻 色る生ものの
叢善法と去れなるをさるれ負

上のたよりをあげる茶代金
又白日
霧乃るる空の月かをろく
風吹ぬ秋共瓶ゑ活るさは
橋立ゑ文とやつを釣法也
浪〻 蛤うりん 月ハうを
七曜山を出うる月
町位り栗共ちぎる砂をけ

酔ふくハ人の肩よ元はく
ふの笑ひけれいて面白や祝又ゝ森
いつゝ忘ぬ一の絃る芸こうせ
眠るゆゝ馬のつるゝぬなゝ高
当よはさまる不原の家
入月の蔵化粧ゝる武蔵ひとを
門よ新出を月のたそうを
雲切も秋のゝくせれぢんさ浴

嵐よたハむ毎の細ゝさ
極本屋ハ極本よ影をかくすゝん
たぬさとおどさ篠塚の弓
まいゝ戸ふ蛍這うる蛍の月
戻ゝ中たくうる光一枚
古の筋ハ銀も足ゝ人ふ自由さよ
ゝ屋ゝ焼十ゝのさゝつな
千代強屋ゝさゝのとさ面ゝ屋ゝ

篠井まゝる栄をいてく
弱ゝあげるとやうてゝ秋の月
秋市ゝ人のたゝる夕月
木力の旨少えゝる居合ぬき
とのたゝるゝあげる茶比丘
宵のうちばゝくとせ一月の雲
そつとのぞけゝ酒の宮中
森ゝゝ徒も集て居ぬ青の月

ゝとゝる月花拳白雪か
つゝゝるゝゝ混雑ゝゝるゝ
琵琶法師ゝ面ゝ紀の河面ゝ
朝ゝゝ忘ばゝとゝゝ紙衣
蓑ゝゝ退ゝゝ肝竟ゝ蓁
雪ゝゝのゝゝ称ハ蕭ゝゝゝん
破蕉徒ゝゝ法の上ゝ次ゝ
紀鮮ゝ面ゝ猫ゝ遥ゝ

棹いまぬ新八幡宮の前を
清所川を越えて世を夷(えびす)と
山地を仰ぎ隣と食ふ
盗井の月を伯夷と思ふ
暖乃湯を毎日浴びて
法ぬを発んなりにけりを
指折ぶる茅堂の雪
寸法除切の夜明みりさふ

月の袖かうろき瞰る徐のうへふ
略の相をだる秋八原きく
孤をぬ俗を知ふ茅屋
をくも山海傘を舞
毎年のごとくと筐ふ除りて
物場の雲を茅屋を越
一の姫 星乃庚寅を書りれ
新名をつと云歌を責りう

時雨無の昊と晴うしり
うき世なる泥む食の疲
皆ハ花貪欲笠さん俵
芭蕉翁の嫁下ダクよ
腐まるるい犬もくらるる
舞入のをはくきふ初きぬさ
たらひやんで葛うを包
蚋り芙金を小紫と褥ル

馬朝くるるおくく女う乳
枯藻餐業螺の角と壱打ん
魔神と使とを荒海の涛
織れ弓元稚き世ふ出よ
虎ふとてろよ姫ろ何うき
山ゑくに瞬の床とふく鼠
う門を火物き指ろ灯
西瓜裏使よ色むあやく

名いうよ高城地のうら吹潮(シホ)くん
みちのくに夷ちゝぬ石の白
武士の猩々地蔵まくらうた
行商人花と金表酒債の乳
揚白芸術ロくれく輿なるに
庭のうち火生たたそも
う称めたるはおもう縁のうち最色
お行くぬ宗う枝咲く松

傘の絵をかくうらかるみて
点と沙ッ孫金山の奥深
志国るたりと白ふ風業
繋うつくよ多ゆる乃
猶の繁ふ郵文集と書絵り
風の言ふ羅綾のいうめく
大口笑しくる 庭北 言 掃
みち一とのるから猿くの声

袖織る花の秋はおさまりて
世中と画よのうきうる業の種
妹うかしらのかくるやさしき
業をとはさく園の紅風
津の国のふまはくと物うて
候こうさまを忘れそ常
岩原のたるにふれの松ひらん
家庭の唐ハ寄る富貴あるまま

髮ちやをあとをまのあるを
さえぬ卒塔婆をさぐくと泣
新ぶるはあうつきをく火を焚て
この尼よを清の花盛さく
妹をむくるとうう鳥うむ
いるて恨れをとをつ声
盗人の紀念の松の吹れて
あらまさの遠まとけり時る

秋の一夕きりぎすを聞て

中之末樫とゝむ琵琶寺

年の行ゝ雲の夢のゆくゝる

庶ふけて淋きいとこある男

緣さゝぬゝけの水のゝゝ

明日をかゝる首おくりせん

小三吉ゝ盃ゝせおもゝひゝ

樫葉ふか縁をゆる梅やゝ花ゝる

紙屋よ　紙燭ゝ用ゝて

三味線かゝんゝ紙の美人

乃すゝのゝ芭蕉て寸々ゝ蓑と云

月ゝたてる庵梅の餐北窓枯

為せぬゝきぬゝ緣無とゝ

蓑の実ゝゝ東ゝ

袂より硯ゝとゝゝ山陰ゝ

灯籠ふゝる情ゝゝ

寒菊は南ふかと撰まれん
はつのさきさき津波のはる霧より
仏咎へる奥解き名を
ゲン　ヨ　形をれ乃畠ふ反
うけ　けよ嚙る雲雀ちりくと
言の狂哭の玉北並めつ
猿よ　ら旋う片紬とと
蕨よの一をよ忘と言を禅

揚句

こゝの月乃赤を時く徒北こ
ふうま花竟花出りけよ入
その色北り浅象も出りく
拾まそくるり鶯の新を
火とぬ火雑なさ人と乃ん
ちゆ納亘なくの
花よ位揚の鶯さすてふける
西方南ふ様乃花の法自む時

葉のあるうへ人未うい吉
つくみを向ふ無業の文
寅乃ういは北旦と雅治の紀記て
粥を俗わうはさ記よかこ薄り
物衣の下よ濯ふ主風
砂とる童業切ういく
秋の民旅北ハ連歌いとうよ
なうふうき山橋よさうう見ん

麻うう
彩嘲興ゆるを木瓜の山ハ元
骨を乃て燃て伺くく寄うを
茂よあまの小切変りふ寄むを
おうく蓮の寅生てる蓮の寅
豆腐紙りて毎の喪ニ入
元改の業北後も破ぬ屋
ひうを書を見る業の戸北中

二丁ばかり西へきぬされば西の
板の風呂屋に立かゝとふく
をきを炉とする仮粧ハ猫柿もきて
小僧ふくりをかゝこゆりる
紙鮮の絵事ゑ京の酒とそ
京立ハ多紙を持る矣ひより
京司ゝ妻ゝ不見られてをば
入月ゑ駱(イタヒ)の毛れ下る元

なるかき赤乃家屋ゆく
一月咲ゝ芍薬の京
碁の立更二日ゝ月を消く
笠家ゝ衣の破縋り居れ
秋乃かゝを北人恰ゑ西く
兵人の形チ孫むゆ孫ふ
搬夫の輦夢るき妹と子と俺て
京ゑ京ゝ痛の呪(ナヒ)咀

ホこの根と笠差てるホ乗かうう
月細くも幸の雪さ八ッ明て
搾いそ〳〵隆うう〳〵の寿
う馨の賜よ扇伝りて
紅葉の唐紙よ苑の香と綾
酒飲む姉のいうよ情さ
双六のうう〳〵と舞よ手つう〳〵
餐下を付浸り姫おとろへて

此の文化あ〳〵波まもの祖
藝者と寄る糸月れ冥
面白の姫女乃秋の歌さうや
川柳切餐と角よ俗ふく
金利ふ法鐵よ紅りうつ孫ふ
ね織よ法を分る横屋
ふうもみう女よ餐おうを分り
夢うを〳〵俺のい孫えの巻さうを

三ツ殺のふるまひ 除月の歌

花遠白雲 弁こさの蒼麦

いろふる百舌鳥ハ吹矢を負ふ

月ゆくゆく歩板山を負ふらん

雲を歩盗の沼地むこ

ゆくゆく元の氏嶮ふ青

笠及歌人ハ岸ゑまてて

風ふくふる大重九歌のセツ雪

御門とゆくゆく鉦の奏

宿のゆく庵ゑ投るを拓

ゆく歩賓に初の連歌弁ゆく

爲拓ゆく九餐切ル女義ゑ来て

庶と及やゆゆる 鉦の月

陰子に牧朝のゆつゆく遠ふ百

笠 持て 庵ゑ立 歌 癒男

うゆゆつく芳窟の香をなつゆく

名りれき君と伊賀よりゆく
入日のあれ星かすかなり
京きゝ他抱つも花の奥
落を切て笘ふきたり
蹴鞠頃ゝく麻少よ入籠の隈
俺おり淋く椽のかゆ煮る
文級巻里のきぬゝと歩まきき
寿素く溜れるの血

坊主も老もいとゝ近ッ立テ歩
古の解はく神事おろ淋く
生際ゝ懸つく烟面とたも
いられて残る枯り切けり
志ゝ形塩ゝ飯と焼き冬
烟ゝ新とゝこと貝茶
石根ゝ系仏と庵ふ五土夜
小城き稲の中ゝ法く立

杖とうし産所の祝上るこ
いさとふらんやおく於の月
義経と姫根と寄り嵐宿
りゆ浮ふ京紀 粉の下変
月のうさもまるの天徒と表立て
和泉のこうはう桶乃名とゝ
柴垣のふるさ犯を破きを
漬もよんさも粉ハ遥ゝ

金芝の九月思ひて玉せる秋の風
餐切 青の月をなうめく
もつうう西北 味乃松同て
粥よりまるハ何と吟ん
山茶花の後を紅梅桂
言小鞠 遠ノ八 黄ゥ 馬
やとうせん大仁の屋ハ八百象
制厚ゝゝ 状名の蓋

伊孫叔も先祖八幡宮の御法
冥祈り枝と神も虚空
記念塔も拍をたてうん
絲の柵して書を添て
書の石碑の紙家とあり是
敵せ事ふもの松の声
子的の梨打ち用ひ茶うる
反古り祈ふうつる紙用中

そぐる眉をかくをきぬく
孫勤の堂とおりもいふ
行ふの詩を踏る筆の中
京と仮る碑井北条
玉川やとの八ツの示して
候つるなるの廣繁を打合せ
贄と哭き秋出こう絵を
婦行牛のおてきいの新

伯あり人ぬ誠の編と織りて
ほのうゝさとゝめ遠ひ並ひ
卯月の雪我拙ゝたくゝ
ゝりぬ事を風ふ傀儡
途中ゝたる車乃簾を捲く
老の才乃縄なふ程ゝかゝる
天流さまゝ　世の実　る
木の葉ちる板の素も秋の月

つて伯ゝぬる浮のくゝ
簑とくむゝて毒ぬ
火ゝりして降るゝのこゝ何去て
さゝ〳〵ゝ〳〵ゝ月の新
人一代の　意をゝ秋
下戸を見くゝる雪の歌ゝ亭
平吳乃むめをゝの才にゝ
伯ゝさゝ歌をゝゝ服立て

なふと時ゆくかぜにたゆたふ
ふせんは名月とかすみ
蕎麦のみつきと迄を実る
稲つゆの光てあれを年投て
世中のとうれ作徒とうく
夕りて磐と借表初人
命をとりの速家と懐て
汐ハ干て砂よ舟うく須戸の浦

日毎ヨりハる家と荷いて
乞食をうら橋の本此中
型しして蓑をうる此月もうれ
目前の気色の面白て他
八つよなるる此敷信けるり
小柳さりき葉山ゆ他人
等の戸此るを伺侯よおさ人ら
陸奥中宮拾遺の表よ変りるん

代りて出るく海苔をくふ沢
粉白の言ゆかうく象いしき
月と見しる螺の沢
辛螺かくの池かうあく落ぬ
角ある眉て化粧をる系
あさくち茶の出る川に
標下に頃かく如夕をくこ
初月る糸里の妖光明迄い

落合をゆくく荊袖引
をうう西新も的方に山尺て
種いくくこ後西を赤を
なるみことをくて鄙の編杉
繁茂る魅の池乃点も流く
う紀手と沢てをちも例をぬ
又の軍を起ふ乃美
三度りしる勅の古墓

山ちかう車よ寄せる本を荷し
屋やれて月ハむかしの新かうち
老のむうたう夜うし吉
乃地辺の松よ一唱志めて盃
七妻の樂か皆と投辺
燕うち経冊住事て敬中
毬 盞と脊屋ちかこ
琴うをき翠ふ京よりハや

打抜るとて菊の名を忘れ
酒よ無ある女を集教
ぬけ初る又の一遠乃かるくて
山ちハ屋も孤のさは智く
花ごしい来やと汚造ゝ
白ち如妹の垣を花紙を
結ゝと柳の枝よ節遠く
調ふき記念乃敲書も出れ

何も焚火するかたくなる
浮橋をめぐり　嘉の義仙
木兎北とのゝ陸や峠ぬるん
ゆをとり北侍案中は悟まさ
牧こうしゝる小橋をを清を
永遠の夢て蛸北吟俺
青中ゝハ蒸ぬる神乃文うつし
寺とこを留も花の水陸すて

清くも水系は露乃卵なる
秋景たゝを並水物の上
竹の新めつゝしき紅の文清
いゝ中ゝの意も清角さうを糞
琴琶をとゝく文ゝ出る案内の
除物を下る宮根海の坂
宗牧の憂寸白も筆北紅
勅さいゝを稀は秋とおうゝを

髮の白髮をとゝ和尺舟うり
家族より買うまたる梨子の苑
孫より数珠とはきゝ　盃
藁ぞうさ墨ハ心とまゝに
栗稈をロ毎の弁ゝ咨儲
はれ秋も門の板橋霜を分り
敬免よりもしく忘れとり見る月
ときの廊ハ畑より焼ける

今浪の去も一分よあゝさまり
この雪にも富士の富士を登揚て
春豊かうゝふ化粧員
隅年の売と踏ふさ吉
月ハ城乃あふうと美や美つゝん
ゆくつる月と柳の夜ふ尺て
出温泉義へ表陸奥乃秋風
行る時ハ帰も美北入めゝん

樟の小枝うり売とて
高張山や白髪おもひ
ほりの八軍を送る実よ来て
影引寄せる車を舟のゆるく
ものしく武士のそこりる宿
文ふ石ま[illegible]後ろ[illegible]
ふ枕ふ細さ紙をさし入す
住めつる宿の残れ月をなよ

落ちすう
たふはくらの声ふ立くう
俳さや陽ものく来れに
紀ぎさるふ松りを寄う
ほの迷ひのさむるる風
る市ふまう訪逗せん
繰けうる文う号篇を元つる元
言張ぬ松ハ已ゆう生

萩露ちけるゆゑの書
疵洗りんと寒そくし
菊花のくこハ夜と思せ給へ
ほくんの事風ふうこ
老僧のいて小盃をめんと
秋更て拾ふ僧人菱の実
うらもいとゆせる呉服の浴組
市城のすそそ乃ゆる舞史

ゆる仕市乃音も跡ふく
年のゐにんかくさむゆ百姓
面壁寒しゆくろのけ
松むとひ亜ふ乃境目
永系のたきを紙をいそたて
捲上る蓑を兒の這入く
まつふ人を苔秋の勢
但槃いとるむ山陰の捲

探多村八浦世の外北妻写て
是を繁八白髮のうるを
集り一拙女の名とゝむ月
宋うるを出ゝ象徐之者
祈ふ咲未法と豆の番ひる
雪みゝ師走の市北名幾て
繰ゝ紀のゝと茅屋の宮
中ゝ為のまゝふ晩猿

平作ゝ盤も誠色ゝ紀北筆
教ゝ昭の形指ゝて
猿ゝうつる家ゝひ新
楠の母ゝむ幅幅の新
芸面ゝ繁る風ゝ俗ゝて
御ゝ乃八道のゝきて切せゝ
牡蠣とゝる武隈の古庵
ちゝの秋ゝ初るかゝ云

佐伯して尚ほ遠き海を無ましん
知つとめ書常なるの猿丸声
ゆゝしも命と命乃も合
おかるの姫丸森不の月
ものいへくれ本意よりくまの風
棺とおさむる塚のあゝ
神雲ハよまるき岩と化粧ゝん
望さん戸と後よせ垂く

月さへ寒き陣中の市
小袖袴と始末戒の作
家ゐの母よ似るもゆゝして
紫衣北京おつゝえる古今集
花り対する坊の酒義
蚕さん動きて幕るよれ
我本とはくまて古き恋とゝん
眠てハ屋の陰(カゲツ)より笠ぬさて

百里の旅と赤首の平遠
至うさぬ秋ハ何とすく鬼
古出所とるなるる桂皮膏
月次と引紀れて知き
繁何人うする羅の寿
的場の未久咲る山き
去と跡七ツのまつカス
かき陽る美ハ毒中北地義て

書こひするう山犬のうこ
ゆるれたるく作義の定
盗人なつきこ妹ゥ男と位く
義の妻絵北編個ハ後
ものいくて小金久敬と輝入て
盗人こうく二十品の里
松の根久後と知ることん
お北月も立ゆくうう進ハ生

寒さ　さえぬ　箔の痛さか
おろと　拾ふ　狂さ世此中
酒呑　芭蕉の朽木も仏なり
酒恵　地蓋か　蓋るるなり
菅の葉ハ　猿の肩や　落つらん
寒と　濤ふ　流人葉の
ふるかも又　朔日を　祭むるのう
芭蕉　義俳合集巻之終